



探偵 ぱんだ



かずお

探偵事務所は、歴史にのこる誰もが知っている大事件に協力し、優秀な調査員が揃い、ひっきりなしに依頼が舞い込んでくる。

そこにぱんだが、スーツにみをかため、颯爽と入ってきて、受付と話していた。

「御用はなんでしょうか？」受付嬢は、真面目には対応しているが、本心はぱんだがなぜ、いるのと、冗談かどっきりと思いつつ、目をキョロキョロしてみたが、平穩であった。

「所長に面接の予約したぱんだにゃ」

受付嬢はびっくりしながらも、所長に電話で確認する、クライアントは様々な人がいるので、見た目では判断できないからだ。

「なんだ」

「ぱんだがきて、予約をしたと申しております」

「あ・・・来たのか。通してくれ」

「・・・はい」すんなりと所長はぱんだを通すように指示をする。受付嬢は断るだろうと思って会話をしていたが、真逆だった。ぱんだを所長室への行き方を説明する。

「所長があったださるそうです、右にありますエレベーターを乗って5階で降りてすぐでございます」

ぱんだは、メモにとり5階に向かった。受付嬢はぱんだにあっけにとられているところに、また、ひとりやってきて、話しかける。

「すみません。調査員面接にやってきたこばしなんです」

こばしの顔を見て、ホッと一安心した表情で対応して、同じく、5階に案内する。

こばしは、閉まるエレベーターに滑り込むように入ると、そこにはぱんだがいた。

びっくりしたこばしではあったが、顔にはださずに心で『ぱんだが、なぜ探偵事務所に来るんだ？』という疑問と、これからの面接の為に練習してきた事を復習していると、五階につき、エレベーターのドアが開く。ぱんだはこばしを気にしていない様子で、すぐエレベーターを出て行く、こばしはすこし遅れて出る。

ぱんだは所長室のドアの前に立ち、さすがにすこし緊張し、一息はいてドアをノックする。

「どうぞ」

「ぱんだです。失礼します」と大きな声でいいながら、ドアを開ける。

こばしは小走りしながら、ぱんだの入っていく様子を見て、心臓がばくばくして緊張が頂点に達していた。

大きく息をはいて、緊張を抑えようとしたが、無理だった。でも、所長室に入らなければ、自分の将来はないと言い聞かせとなんとか、抑えてドアをノックした。

所長、ぱんだは入ってくるこばしを、待っていた、こばしはふたりに頭を下げながら、席につくと、所長は二人見て、話す。

「ここに呼ばれた時点で、採用です」

二人はあ然とした様子で所長をみるが、本人はあっけらかんとしたかんで、話を続ける。

「ここまでの二人の今までの行動、生活全てを調査員が調査、監視して、それでまずい事をした人は呼ばない方式で残ったのが、あなた達なわけ」と所長が説明すると、呆れた様子の副所長が説明を始めた。

「今日から二人はコンビになってもらいます」

二人は顔を見合わず。

副所長は二人を構わず話を続ける。

「研修担当者として、所長です」

指名された所長がびっくりして、副所長をみて小声で耳打ちする。

「あれ、研修担当者は副所長じゃなかった」

耳打ちなど構わず話を続ける。

「必ず指示には従ってください。シュミレーションではなく、全て実地です。あなた達の失敗はお客さまにご迷惑につながります。」それを聞いた二人の顔は、よりをまして緊張感に包まれている。所長といえば、自分に研修を押し付けた副所長にいたずらをしようと、いろんな事を考えては、やっているが、無視されてすねている。

「・・・以上です。では所長からお話があります」

振られた所長は、すこし焦りながらも、こほん咳をすると、話を始めた。

「今日から、君たち、二人は名誉ある探偵事務所の調査員だ。私が研修担当だ、甘くはないぞ、駄目だと思ったら即刻やめてもらう覚悟で望んでもらう」といいながら、舌を出してみせたが、誰もそれに気づかず、緊張感はさらに増してしまったようで、ひとまず解散して、二人は入社手続きを行うため、事務所に入ると、調査員の多さにびっくり、ぱんだは目を丸くして、こばしはまわりをなんどもみていたが、副所長にせかされて入社手続きを済ませて、会議室に通された。

副所長はここで待つよう言い残して、会議室をあとした。

入れ替わるように所長が、慌ただしく入ってきて、席に座り話し始める。

「副所長がいろんな堅いことを言っているけどさ、気にすることはないよ。・・・でまず、二人とも自己紹介してくれ。まずはぱんだから！」

指名されたぱんだは、椅子から立ち自己紹介を始める。

「名前はぱんだにゃ。これでも人間と同じ生活をしてきているにゃ。よろしくにゃ」

続いてこばしがはじめる。

「こばしです。真面目がとりえで、何事も一生懸命です。よろしくお願いします」

所長がそれを聞いて、ボソッといった。

「副所長とそっくり」と言い、面倒なことにならないければいいが思ってた。といっても、自分の大雑把な所をカバーしてくれているので、感謝しているのだが、複雑だった。

こばしには聞こえていなかった様子で、所長は次の話を始める、ぱんだは聞こえていたが、所長の雰囲気が悪くなかったので、突っ込むことはしなかった。

「失敗してもいい、全部報告はしてくれ。隠すな。社会人だから最低の事は分かっているだろう、それは教えんが、探偵に関しては赤ちゃんだからな。失敗はつきもの、承知だ。だから、隠すな、単独行動構わんが報告はしてくれ頼む。」といって、所長は本を二人にわたして、話を続ける。

「今渡した本の中身を、頭に入れる。それが今日のお仕事。明日から実践するから、頼むわ」

所長が本を配ると、二人はかぶりつくように読みだした。

「ふたりとも読むのは結構だけど、受験とかじゃないんだから、暗記はせんでくれ」

所長のそんな声も耳に入らない様子で、二人は読みふけっているのを、心のなかでぼやく。

『こいつら、対照的な性格だな。でも・・・不思議だな』たしかに、所長のぼやくは当たっているようだ、ぱんだ、こばしの二人は、初めてあったばかりなのに、関係性が成り立っているところがある。

二人はそんな事にも気づかずに、さっき言った所長の一言も忘れて、本を読んで重要と思える場所にラインを引いていく。

一日の就業時間の終わりを告げるチャイムがなる。最後まで所長は二人と共に会議室にいて、このチャイムが待ちどうしかったらしく、一番先に立ち上がり、叫ぶようにいう。

「今日の研修終わり！帰っていいぞ」自分が一番、嬉しいことなのであるが、そこは所長としての役目を果たさなければと、厳しい口調で言おうとしたが、口は正直者で開放されて気分が表現されてしまった。

二人は所長一番、嫌がっていたことをすこし、ある種の馴染みやすさを感じながらも、真面目な顔で指示に従い、会議室を後にする。

明日から現場に入って、所長、指導の元、探偵として修行日々が始まるのである。

事務所にて、与えられた机を整理するぱんだとこぼしの二人のところに、所長がきた。

「おはよう！」

「おはようございますにゃ！」

「おはようございます！」

二人ともに、元気な挨拶が帰ってくる。所長はこの依頼なら、二人にぴったりだなと思いながら、あとで会議室に来るように二人に伝えて去っていった。

「所長、何の用事かにゃ？」

「なんででしょうね。早速、仕事とか」

といって二人は盛り上がりながら、朝の朝礼、全体打ち合わせを済ませて、会議室にいくと、所長は先に来てまっていた。実は、副所長に急かされて追い出されたのだが。それをいしらない二人は、かしまって所長の前に立ってる。

「ここに来てもらった理由なんだけどさ。いい依頼が舞い込んできたのよ。二人にはうってつけのがね」

「どんな依頼なんですか」こぼしは、興奮した様子でもなく、冷静にきく、ぱんだはすこし、興奮気味ではあったが、聞くことはこぼしにまかせたようだ。

所長はすこしためながら、依頼を発表する。

「飼い主探しだ！」

こぼしはあっけにとられ、ぱんだはまだ状況をつかめてない様子にも見えるが、よくわからなかった。しかし、最初に声を出したのは、ぱんだだった。

「なんの飼い主探しにゃ？」

「子犬だ」こぼしは、二人にわって入り、所長に質問をはじめめる。

「探偵って、子犬の飼い主まで捜すんですが！？」

所長は涼しそうな顔をしながら、答える。

「お客さまの依頼なら、受けるのがここの主義だから」実は、所長が言っているだけで本当は副所長はこの主義を認めおらず、唯一の対立である。

「そんなわけで、いってらっしゃい」と言いながら、所長はぱんだに依頼書を手渡して、会議室を去っていく。残った二人、特にこぼしは呆然とし、ぱんだはヤル気満々でいた。

ぱんだは早速、依頼書真剣に読み始め、こばしは理想とかけ離れている実習にやる気をなくしていた。

「困っている様子にゃ、早速、依頼主の元に話を聴きにいくにゃ」

こばしはぱんだに引きずられるような形で、事務所をあとにする。ぱんだは待ちに待った初の依頼を成功させるべく、ヤル気満々だ。

依頼主の自宅の前の塀には、依頼書にあった子犬の飼い主募集というポスターがはられていた。こばしは、ポスターを見ながらいう。

「これだけで、なんとかなるんじゃない」

事実そのとおりで、実際探偵はこんな依頼を受けることはない、所長があまりにも、ひとがよすぎるただそれだけである。でもぱんだは違った、玄関の呼び鈴を押して依頼主から話を聞いている。こばしはあぜんとしながらも、助手としてぱんだを手伝うべく、駆け寄り、メモを取り始める。

「セールスポイントは何かにゃ？」

依頼主もびっくりしながらも、答えている様子がこばしには、面白くてしょうがない、ぱんだが背広をきて、人間の言葉を喋っているのだから。こんなあり得ない状況で、とうのぱんだは真面目だし、困惑している依頼主をみているとふきだしそうになる。

そんなこばしに気づいているのか気づいていない様子のぱんだは、真剣そのもので、依頼主の話を聞いていた。

「こばしから、聞きたいことはなにかにゃ？」

突然ふられたことにびっくりしながらも、的確に質問をしていく、これも所長が渡してくれた本のおかげである。依頼主との話を聞き終わると、ぱんだは、場所の選定をすることにした。

住んでる人間、構成、年齢を元に、ポスターを貼り出す地域を選定していく為、一度事務所に戻ることにした。

事務所にもどり、こばしはいつのまにか、自分が助手になっていることに、疑問に感じていた。一方ぱんだは真剣に得たデータを元に分析をしている。

こばしは探偵とはかけ離れる仕事内容に、疑問が頭にもたげる、しかしぱんだの真剣な姿勢が押されて、ぱんだの言う解析データを表計算ソフトと入力していく。

「できたにゃ」こばしは、ぱんだに素朴な疑問をぶつける。

「ポスターは？」

ぱんだは何事もなかったように答えた。

「依頼主の作ったポスターをカラーコピーするにゃ」

こばしはつくえにあたまをぶつけて、さすりながら、意見を言う。

「ポスターは何か案は考えてないの？」

「依頼主が作ってくれたポスターが一番、子犬に対する愛情がこもっているにゃ」

納得してしまう、ぱんだのいう言葉は説得力があるというのを、痛感させられた。

こばしからみれば、ぱんだの行動は理解不能な部分と理解出来ない部分の隔たりが大きく、二人を相手にしているような状態ににている。

こばしにぱんだは依頼主のポスターをコピーするよう頼むと、会議室を出て行き、事務所で用事をすませてから、所長室に向う。

ぱんだにとって所長は尊敬の対象であり、凄い人であったが、そんな人からの呼び出しは、緊張でいっぱい。

こばしは、ぱんだに頼まれたコピーをしていた。

コピー終わると、こばしは副所長に声をかけられた。

「こばし君、うまくやってるか」

緊張した面持ちでこばしは副所長の問に答える。

「はい、ぱんだ調査員とはうまくやっています」

「そうか、所長どう思う？、率直感想を聞きたい」こばしは、副所長はなにを聞いているんだろうと思ったが、疑問を口にするまえに自然でできた言葉を話す。

「どう捉えていいのか、分からない人です」

その言葉を聞いて安心した様子で、副所長はうなづくと去っていく、こばしはその表情を信用することにした。

その頃、ぱんだは所長室に入り、所長が話し始めるところであった。

「ぱんだ、どうだ、こばし君とはうまくやっているのかね」

「はい、こばし調査員とはうまくやっていますにゃ」所長はぱんだの言葉遣いを気にすることなく、話をつづける、副所長であればにゃを指摘するところである。ぱんだも気付いていたが、所長が指摘せず、話を始めたので訂正するのをやめた。

「副所長をどう思う？」

さすがに、ぱんだもすこし言うのをためらい、副所長たてて話そうとすると、それを察したかのように所長は補足するように言う。

「ここに副所長はいない。気を使う必要はないよ。率直な意見を述べてくれ」

「堅い感じで、直感的行動が出来無そうな人ですにゃ」

所長はぱんだを意見を聞いて安心してほっとする。一方ぱんだもほっとしていた、副所長の悪口をいったような形になっていることをきにしたからだ。

「ぱんだ、今回の依頼の進行状況はどうなってる？」

「ポスターを貼る地区を選定終了して、コピー終了しだい貼る予定ですにゃ」

「よし、わかったポスターの貼る許可はこちらで取っておくから、予定通り進めておいてくれ」

ぱんだは所長に軽く礼をして部屋を出て行った。そして所長は言った。

「副所長、見ているよ。たく、頭が堅いんだから、俺がやった通りであればいつも万事解決じゃねえか。でもなあ、あいつが言うことも正解の時があるんだよな」